

〈私 の 研 究〉  
、 象 徴 の 川 、  
井 上 二 郎

「私が最も愛着を感じた詩のあるものは、一読してその意味を理解しなかった詩であった」と言ったのはT・S・エリオットであるが、ジュエール・ド・ネルヴァル（一八〇八〜一八五五年）の作品に対する私の趣向にも一脈通じるものがある。

「ロンサールからユゴーに至るフランス詩」においては、「言葉」は事物の実体を明確な輪郭において表現し、纏綿絢爛たる抒情詩や壮麗雄弁なる叙事詩を生み出した。ところが、「言葉は事物を示さず、事物を喚起するものである」（ネルヴァル）とする言語観の革命と、人間にとって本質的世界は心象の世界であり、外観的世界はその象徴にすぎない、つまり、心象世界と現実世界との関係は光とその影との関係であると考える

象徴的世界観とを、フランス詩に恐らく始めて齎した人がネルヴァルであるといえる。彼の企図は後に、チボーデによって「呪われた詩人たち」と名付けられる象徴派の人々によって開花され、その流れは超現実派の人々におよぶのである。在来、意味の固い殻の中に閉じこもっていた言葉の中に、呪詛によってでもあるかのように、象徴的匂いが凝縮され注入される。言葉は「言わずに匂わせる」（マラルメ）ことが役割となる。こういう言葉が詩人の手で配列の妙を得るとき、各語はその「核」を破って連想は連想を生み、象徴の連鎖反応を奏でる。ネルヴァルの用いる詩の各語、各行は象徴の意味の重層圧縮である。片言隻句は彼の不幸な人生体験（失恋・狂気）、広汎な読書による知識（特に、神話や、錬金術・占星術などの秘密学）の寓意がある。アルベレスという人はネルヴァルの制作の本質を評して「自分の理性を脅かす数々の夢を冷静に分析することにより新しい形の知識に到達しよう」とする努力であるとい

う。

そこで、このような作家の作品の理解には当然、微視的視野における詳細を極める分析が必要となる。詩の各語、各行に含まれる寓意を一皮ずつ剝がすためには、彼の人間形成を知っていることはもちろん、その作品が書かれた当時の書翰の研究や原稿のヴァリアントの比較考証などの論理的な傍証の研究が要求される。しかし、論理的な分析研究はあくまで鑑賞のための手段にすぎぬ。論理を尽してから非論理的啓示を与えるための知的飛躍が要求される。このことは対象の性質上、当然である。つまり、巨視的視野に立つ総合把握のための直観的観照によって詩の味読の本質が達せられ鑑賞はより完全になるであろう。総合把握のための直観は、論理的分析という基礎が強固であるほど正鵠をうることは論を俟たない。さて、ネルヴァルは象徴主義・超現実主義の一派流と見られるが、この源より発する奇妙な屈折に富んだ非情の川を、酔いどれながら下るスリルもまた、私にとって楽しいものと思っている。

（商学部助教授・フランス語）